

## 東西ドイツにおける町の発展

1990年までは、西ドイツと東ドイツでそれぞれ異なる社会制度・経済制度がありました。戦時中、連合軍の爆撃機が何もかもを破壊し、ドイツの大都市は本当に消し去られました。西ドイツではすでに1950年代以降、流通機能や住宅街といった都市機能を都市周辺部もしくは郊外に移転させ、市中心部には企業やショッピングセンターが建ち並びました。郊外からの通勤者のため、街には近代的なインフラが整備されました。車が移動を楽にしてくれるのに合わせた町の整備がなされたのです。西ドイツでは、様々な利害のバランスをとらなければならないこともあり、都市計画の策定には長い日数を要しました。しかし、ひとたび決定してしまえば、建設・整備は迅速なものでした。東ドイツでは、国民の抵抗・反対を受けないうちに策定してしまいたい思惑があり、都市計画は早いものでした。しかし実際の建設には、とりわけ住居整備の分野で西ドイツよりも長時間を要しました。なぜなら資材と労働力が慢性的に不足していたからです。首都の見栄えが最優先されたため、多くの労働力がベルリンに集められていたのです。

新しい土地を開拓するには町の郊外のほうがかかる費用が安く済んだため、共同集合住宅が郊外に多く建てられました。町の中心部では、戦争で破壊された教会も再建されないまま手つかずのものも多くあり、中心部を復興させられるだけのお金も資材もなかったため、住宅難はいつこうに解消されませんでした。町の至る所で交通渋滞が慢性化し、それを迂回するための道路も建設できませんでした。排気ガスや騒音もひどいものでした。

東西ドイツ統一後になってようやく、東ドイツの各都市にも近代化の波がやってきました。道路は拡張され、迂回道路も多く建設されました。多くの商業施設も市の中心地から郊外へと移転しました。



©Sebastian Trommer

東西ドイツの住宅建築に大きな影響を与えたのは、第二次世界大戦前に東ドイツ・ワイマールに設立された建築学校「バウハウス」です。バウハウススタイルの建築の特徴は、緑に囲まれた多層建築であり、ベルリンにある蹄鉄型建築群（写真）は世界文化遺産にも登録されています。